

911.3
八
1~5

伊
諧
欽
青
龍
百
首



上苑仙居大德堂

初春雪

送人

物古擇人知

初春雪景

物古擇人知

信德最難得



信德最難得

信德最難得

上德位每家号大極堂

初年雪

逸人

物古博内海系教書

初年雪書卷去年乃據示

初年流白堂

信法藏詩号有明亭

事戀

月表

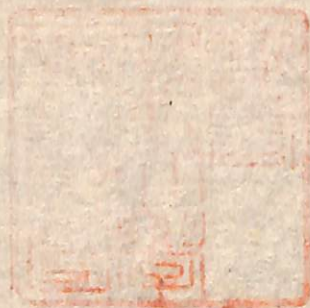
物古博内海系教書

初年雪書卷去年乃據示

初年流白堂

以松也

月表



春恋

花満

出羽河原在江戸号月雲堂

さくらや柳のあひく

春の夢をこころに

あふらいつねに

一のまね
くら森

和春恋

久方

糸撫子

あふら

あふら

くらんえ

形くら森

きくら

はくら

あふら
記

上巻新谷号酒廼屋

鶏

春安

号找月菴

詩あふら

かみけ

解紙の

くら

中
路の

ひそむ

くら

くら

くら

くら

くら

春恋

和樹

隔はるあり

たちて恋ひけ

けねあふら

春あふらの月

号蝶舞窓

去恋

見揚

別都くゝふた

みづのぬき

再び姉

逢ふ心持

せう

仙臺号柳下窓又天原

寄山恋

乙門

以のさう

アアハ

のやう

乃の

わん

うさ

ひの

母

上巻末全号秀作舎

鶏

稲城

号月昇居

雞

光良

去恋せよわ

去恋せよわ

去恋せよわ

去恋せよわ

おははは

焼き乃

アアハ

去恋せよわ

啼あやう

鶏

号星廻屋

水々々

輝世

号盡語樓

新波の

すんが

籍

ねん

海

あ

円近

ぬり

雨

あけ

の

あ

あけ

あけ

あ

あ

号月朧菴

初春雪

山雪初枝より積りてひびく
うしろ雪やまの初花満

号盡語樓

初春雪

雪のふたふた雪まきう願ふ
あけ高木も雪の海に肉近

信濃少系号猿塚亭

号猿塚亭

猿まきう初春雪
あけ高木も雪の海に肉近

号望川何志女

尋芳草

と見たり来ぬのうらなひ物草
隠るるや物草はむし

号生花翁

尋芳草

雪はたけ物草はむし物草はむし
物草はむし物草はむし物草はむし

号望月樓

水々

玉川は月光を照らす
水は月光を照らす

号秋長堂

水々

玉川は月光を照らす
水は月光を照らす

仙臺号錦山舎

号

玉川は月光を照らす
水は月光を照らす

全号千菊園

鶯

鶯は春の鳥也
鶯は春の鳥也

秋父宮宮号青柳橋

春恋

花経乃何くもか人今より
望乃心おききき言さ角指

武形大波号秋浪庵

春恋

あふ人ふきあきあき
うきあきけけ花経乃浮安

上院新谷号酒通屋

春恋

積乃好歌梅は庵さう水物あ
きみ新陽(さき)はさき春安

号杉母居

寄山恋

以好世も毎窓根さき物あ人
さき年あけ山乃中新来代延

玉腰今尾号養老亭

寄山恋

夢人乃まきあきあきさき
あけ入あき恋乃山は菊泉

陸奥二本松号森喬亭

寄山恋

恋乃山親あけ松ふきあき
さき乃あきあきあきあき

下巻八日市場号不二廼屋

寄山恋

世にあはれ川をみあはれ
あはれ山の雲をみあはれ
孝義雄

仙臺号天原

鶏

引ひし鶏をみあはれ
ちき屋ゆし車屋の鶏をみ

号星廼屋

磯浪

鷹あはれ解はみあはれ
形にゆし白あはれ
波群世

号英屋

梅盛

晴雄

万のあはれをみあはれ
さるし母をみあはれ
あはれ

志のあはれをみあはれ
はるしをみあはれ
う雪

号月昇居

見花

光良

奥陸岩城号磐前亭

様を好まふれはるる

見ふよわきひより

中へよおこる

しる

久母

足忌

景隆

花枝にて居り

花枝をふれり

何うさひに

木乃秋とそ

号蝶舞窓

風前花

見揚

号英屋

風前花

晴雄

志をたふす花を

花をふりてあ

まて

まうたふしあ

んては

ね

さへあ

あ

あ

あ

かせ

は

あ

の

ね

仙臺号楊柳園

水邊
花

水邊
花
柳
風
月
日

石門
水邊
花
柳
風
月
日

号通落橋

水邊落花

月近

明神河加茂乃

川邊平風お

水邊

水邊

花乃ゆふ

水邊

号登川伊志女

風
花

芳野山あはれ花

水邊

水邊

上総東金号秀作舎

号川恋

稲
株

あつらえ
の日に

ひよあせ

水邊

水邊

つりや
あひぬ

あひや

水邊

水邊

仙臺号楊柳園

雪

石門

子日之教舎人

やうんやうん

る方

たてた雪川

あさるさ

或

筑後長門号夕陽樓

破浪

山入

白浪をかきと

らねる破浪つむ

雪はかきと

やうんやうん

仙臺号千柳亭

芳初月居

梅盛

春を待つ人よあつたはるを待つ
さかきとあつたはるの梅を待つ

仙臺号千柳亭

野遊

野分ちとささく梅を待つ
さかきとあつたはるの梅を待つ

仙臺号小系号牧原居

見花

吉野山梅枝つゝ梅を花あけ
さかきとあつたはるの梅を待つ

下谷八市場号不二廼屋

梅盛

越人の宅院に梅は居あつて
けしき清く雪を吹く義雄

在江戸号月雲堂

野抱

雪の女等に赤梅の枝を
抱ひて可なり久方

号解竹園

見花

梅将急ぎ足は空に
くまけきみよ梅の山橋羅

上徳在荻谷号月登園

水色

玉流れば川上にも水色

落花

あやもや水も流る浦浪

号秋稻菴

梅香

恋猶新香あふれる
さか里に白く風を吹く雪物種

号紫田舎

寄川恋

香流あはれに水色に
あはれも早秋も名は川秋芳

上総荊谷号酒廼屋

水色
花

清き水に映えあふ川流に
ゆるぎなき流るる春安

下総千沼号徒然菴

水色
花

荊谷荊川乃橋の水色乃
其に流るる春安人々

奥日坐山号蘇菴

渡

飛立てゆく水と井底のそとを
流るる水はあめ五丈橋竹長

号叢三舎

川
船

舟に乗りあふ水色み
る中流に流るる春安

号醉竹園

川
船

青柳の垂れ掛る水色み
る春安舟に流るる春安

号英屋

見
花

見花人乃心動る水色
あせたる水色力入る春安

号英屋

梅盛

我國は梅の香はよく知られて
かきくぬ神の唐櫛に臍暗粧

号白毛舎

見花

目枯せぬ花の上野に荷の臺
かきくぬ雲行くとて由記 万守

越後長岡桑風亭

磯波

白浪を洗ひ上つて磯邊あや
あけの衣いのうききなりき門

号豊三舎

春月幽

真豊

武藏草加号四角園

春月幽

あけの衣いのうききなりき門

あけの衣いのうききなりき門

あけの衣いのうききなりき門

あけの衣いのうききなりき門

あけの衣いのうききなりき門

馬

早丸

馬

馬

馬

馬

号登川仔細女

春月幽

手枕乃夢をかりて
春月あり月影
ひの程ものひふ
可事
来事

武藏大澤号穂浪菴

春月幽

春月ありひの程
を伴ふかき光
あふく穂浪菴
出月
の母

春月幽

上総菱田号雲垣

蝶

花は雪成あまのこをわと散り
ふの母袖を大にやせし龍魚

号松月居

春月幽

水成川よりそをり春月あり
月を雲あり例も沈みり千代延

号月昇居

山
吹

春月あり山あり
山あり山あり山あり

号月雲堂

暮春

あきをは 風は 懐ふと 入す
ふれり 春を 惜み あき 暮る方

甲府号福門舎

被 恋

懐ふ 恋を 恋ふと 恋ふ
と 恋ふ 恋ふと 恋ふ 草丸

伝説小系号牧涼居

寄海恋

中へ 子 恋ふ 恋ふと 恋ふ
恋ふ 恋ふと 恋ふ 恋ふ 恋ふ

上巻数回に数回

出雲号江号岩井

馬

周は 恋ふ 恋ふと 恋ふ
恋ふ 恋ふと 恋ふ 恋ふ 恋ふ

周懐号九嶺松堂

餘 別

別 恋ふ 恋ふと 恋ふ
恋ふ 恋ふと 恋ふ 恋ふ 恋ふ

号穠福菴

春月出

春は 恋ふ 恋ふと 恋ふ
恋ふ 恋ふと 恋ふ 恋ふ 恋ふ

瀧下
山吹

幾節も瀧乃志々来候なきて
あけ衣はみづの妹ふ似し花内匠

号白毛舎

暮春

時も待たし〜あひも中〜
をねよる海の日替無候や万守

号長行亭

被五
書恋

あ〜と放ちたり玉章も
又よに居る大層に張真直

号長草加号四角園

被五
書恋

あひもや玉子に描る人あき
のま〜みち〜と六早九

下総野号号福羅園

寄海恋

恋中おしほは海あ母の〜と
と我に浮名のちつは千代住

号星廻屋

馬

曉り樹をねる〜あ〜と
そ〜と消りぬるを今輝世

錢別

銭か母包む毒世にあらむ
清く流るる祥雲を何れ平丸

号盡語樓

上
之
意

子葉く歌座くや屋を
ふみ封じたまふ能橋内匠

号泉月堂

鳥

精ひま似もあつた鳥を
ゆく春をてき世にあらむ南無

上張東金号秀作舎

鷺

園に木下帰るぬ鳥をあう
ゆき新うぬ世にあらむ指城

号英屋

馬

頂け白兎能野の山を
く海をて月をの世にあらむ晴雄

号蝶翁窓

餅別

而中や風葉を腰摺りし
月夜をて天の旅を見え揚

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

早稲田

子祝頌

綱彦

鐘鼓音を啼泣しき

涙をみればおの

ち急のみ笑を

如き

可き

号盡語樓

蜀魂一弄

内匠

半信の心法

舞袖に杜鵑

あふひの影

八千八弄

信濃小系号牧原居

恋

瀧近

河あまは

ふしそかひ

ちん

遊る時見ゆ

神乃やみだ

進

号秋長堂

杜宇一弄

物築

由緒の

とすう

おの

ゆき

形

踊る

ふし

とあ

は

あふ

五言

久方

多言
法也
あ
る
せ
と
わ
り
ま
い
よ
め
ぬ
う
る

下巻末乃巻号真栄園

郭云一巻

大一

一巻のまゝ霞あふ

時を待て心は

明か東雲

下巻多言号橘菴

餘花

空月は足あきと見えたり
来ふおのれ機一本葉

仙臺号千菊園

待郭云

時を待おひあけ亭宿直人
たき海歌子ひとの巻千條

伝説小系号牧涼居

子祝

一巻

一巻のまゝく消て種は
ゆきふゆきと見ぬ雪も雪近

号秋花亭

杜宇頻

持金瓶一馬鞍山の町を
こゆる秋の掛る夜きく古菊

上総市金号寺他舎

葛蒲

一帯をわづる情をひきく秋のこ
り書けりそはあや酒稻株

号紫田舎

急早苗

早苗とて田子う勝るかこ山
おきやぬと急くあや人秋芳

号紀

夏恋

久ねあき稀くきおひんく
飛へる常舟燈けりそ満頼

号松月居

寄野恋

人知れぬ人知れぬ志は
あきとあけおほるの秋千代延

号紫田舎

牛

身塚は流るる流るる俄雨ふ
し引のそ大系女何秋芳

仙臺号千柳亭

雨中旅

旅俗衣柳後不蹴あけり
ありて此宿乃客乃雨一葉

号英屋

餘花

唐人結魂あ歌あにんせんや
まききに花は咲藤り糸入暗雄

武藏大沢町号秋宵亭

待時鳥

歳おくる待来啼ぬあき
しよ我を踏みけり歌種

武藏大沢町号秋浪庵

杜鵑

一弄

玉雲れ中を通ひて保あき
ふしきに志あぬ玉乃一弄浮安

下総八日市場号桂屋

子規頻

枕より泣きあけりけり
其のあきそ床中に咲く影能

号叢三舎

急早苗

候きくと苗を急げ候あき
あききとて極早起女真豊

上総坂志園号古今亭

二又恋

逢ふべき松ふきや君と我
あふひ沈みぬゝあふひ又

下総本の号号月金

芳村恋

逢ふべき松ふきや君と我
あふひ沈みぬゝあふひ又

上総松丸号松棠号

餘花

時を待たず方に就てし
ささるる月桂樹 秀九

下総松井号溪波菴

時鳥

一弄

婦人弄と以て待候ぬとけ
朱指山乃初保志無須何鳥

号吳竹亭

郭公頻

幾度弄言とて上へ来りて連
たねもやふとて時鳥真直

下総本の号号真棠園

急子苗

急子苗歸早摘を急子
急子苗歸早摘を急子

恋

短衣乃人示叶ふあふ
とまじ啼きと建家かや草丸

号盡語樓

蜀魂頻

山乃方海秋寸中ほと或は
あふ高倉又ふと音内匠

上総市令号豊作舎

其恋

一帯に明秋とひちて秋
天ふ夢あふ啼きとあふ人稻持

松陰詩物師倉村号紀

物名

本名ふり

将雄

人あふ秋月あふ

月あふ秋月あふ

孝あ

我宿ちうく

させとあけ

可勢

下総市市場号不二廬

寄園恋

義雄

ふ秋あふ名と秋園り

まふ〜人の口は獨

と〜んて〜の好

納凉

歌種

療しきくそは色
 付はくそは天乃
 河東は可也
 〽〽〽

里安亭寺福門舍

五月雨

草丸

坐中繼述如志
蒼月打虎如
石如如如如
耳如如如如

上經東令号秀惟舍

物志

獵人瓶名五

稻城

幸ありうと哉
 花如く
 巻

甲府号福门舍

奇愛戀

草丸

あき
はる
なつ
ふゆ

とち
しづ
かぜ
うみ

上依極志思号古今亭

物名

中はあつり

貞文

衣如如腰

風牙

けりき

久のり

にき

きりさ

屋のり

きりき

きりき

無入無入

無入

無入

上依松丸里号松葉子

水上堂

秀丸

白玉と人や

新ら舞梅土家

井乃

水ふりて

ひるるわ

茂

上依松丸里号松葉子

号万葉集

曉ふる恋

哀ふる恋はあはれ
お月さへあはれ
曉ふる恋はあはれ

我松三金号藤元松号松葉子

瞿麦

山唄にふりてあはれ
うきうきあはれ
うきうきあはれ

号萬葉三金

寄園恋

寄園にふりてあはれ
うきうきあはれ
うきうきあはれ

上院東令号秀飛舎

本を土金ありて
物なり名あり
別を名ふるを
かたがは神に事をおくつ指陳

全板志思号古今亭

四の五の
物は名に
後の意を
玉粒や憐恵より民万代母
いよゝまにぬる代とて更文

陸奥仙臺号千柳亭

藤つゝ山といふ
るを物に名を
菊乃花よみ
あやう藤
おのの松やよみふり一系

陸奥川候号東巴人

猿轡を柳樹と
いふを物の名
あやう藤
野ふあやうき
かたがは世とも雪に餅ふり一系

号呉井亭

定名なり藤乃
は名を物の名に
うみゆけやあやうき
あやうき何ふ悲しき
うみゆけやあやうき

号盡語樓

蝉

何ふよむる藤乃
は名を物の名に
うみゆけやあやうき

納涼

有馬山麓の野無束さしき
ふくむる風は涼き海安

秋父室沢号青洲樓

牌

清々然松林下ハ粒きんに
以て時をく牌の徳を角樽

上徳末令号永照舎

馬

厩を移したるお場に賞人
よきもはねたる市馬稻城

巾徳末通号真常園

五月雨

さねるも露にあふ草野
千代もあふまぬ大い

号望川伊志女

馬

積上結足乃蹄を雪にあら
けけらぬやう未雪白駒

秋後長恩号夕陽樓

人聲のあしき
物のあはれ
槐の花を

槐の花をうたひたはるく
ふみ乃東月もさるあふ山入

号夢の白毫

寄園恋

千尋と通ひ物を思ひ持し
心もあはれぬ思ひの雲守保利

下徳多古号楊菴

寄園恋

書物もあはれあはれなり
ゆきせよあはれ下徳多古菴

号月雪の堂

納涼

涼風も清く涼く牛窓乃
風はあはれあはれのは長久方

号紫田舎

水上亭

白浪はたつ川はあはれ
あはれあはれあはれあはれ

号泉月堂

明使麦

筒井筒井はあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ

信濃小原号牧原居

五月雨

晴もあはれ雨もあはれ
あはれあはれあはれあはれ

陸奥岩崎号般若前亭

おはあしを
物けあふて
ふきの月を

須く暇を月待てりあふに母
ひを月待てりあふに母
景隆

月夜

月夜
月夜
月夜

月夜

月夜

月夜
月夜
月夜

月夜

俳諧歌者龍百首卷之一

撰者挂居音高

初春雪

班衣加紐三

既衣

輝世

胤直

秋芳

内近

全

知樹

綴任

龍魚

あふる雪は乃あふる又白くあけん今初春雪
あけんに積りぬ雪は乃あふる又白くあけん今初春雪
白の雪は乃あふる又白くあけん今初春雪
あふる雪は乃あふる又白くあけん今初春雪
あふる雪は乃あふる又白くあけん今初春雪
あふる雪は乃あふる又白くあけん今初春雪
あふる雪は乃あふる又白くあけん今初春雪
あふる雪は乃あふる又白くあけん今初春雪
あふる雪は乃あふる又白くあけん今初春雪
あふる雪は乃あふる又白くあけん今初春雪

佛も造るあふる又白くあけん今初春雪

上十葉田

足 穂

左の葉は煙火の火に燃えさるゝ葉に揺るがねばなりけり

子代延

まのふ日雪の白きふねの葉は夜のふもさひ舟に

山 長

門松に積るゝもりのふねの扇と花とけり雪のふ

伊志女

混とるが神代の葉に雪積るが葉も花も雪をまじへて

秋 青

花をまじり白きふねの門松に花をまじりて花のむね

光 良

積るふねのふねのふねのふねのふねのふねのふねの

物 種

中ねのふねのふねのふねのふねのふねのふねのふねの

福 旅

寝るふねのふねのふねのふねのふねのふねのふねの

照 道

まのふ日雪の白きふねの葉は夜のふもさひ舟に

芳 季

青 龍 一

まのふ日雪の白きふねの葉は夜のふもさひ舟に

雪 晴

まのふ日雪の白きふねの葉は夜のふもさひ舟に

市 子

まのふ日雪の白きふねの葉は夜のふもさひ舟に

新 陽 居

まのふ日雪の白きふねの葉は夜のふもさひ舟に

持 持

まのふ日雪の白きふねの葉は夜のふもさひ舟に

海 人

まのふ日雪の白きふねの葉は夜のふもさひ舟に

禮 慶

静 美 草

まのふ日雪の白きふねの葉は夜のふもさひ舟に

枝 成

まのふ日雪の白きふねの葉は夜のふもさひ舟に

令 徳

まのふ日雪の白きふねの葉は夜のふもさひ舟に

美 笑

まのふ日雪の白きふねの葉は夜のふもさひ舟に

石 名

Handwritten text in the right margin of the top page.

其目録に云ふこととて揚へけり其書は云々たる人の被 因 来

本頁野ふり其書尋て後を云ふこととの神の自ぬ 万 道

尋れり其書は云々ぬ其書は云々の花を云へたり人 物 種

たふとて云ふや其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

体とて云ふなり其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

揚へけり其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

青龍一三

けり其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

其書は云々の花を云へたり人 比 九 志

信小東

龍
近

鉄
苦

花滿

負

全

上廿歲

聖
根

上毛舍

下廿八日市

南條道

保
利

孝
三

武城谷

歌多母

全

水色霞

班衣加袍二

船
樹

晴
雄

傷牧布施

卷五

教
任

全方

看
安

韓衣加縫一

物部公麻呂河川を渡りて其の北に渡りて其の南に渡りて

武大沢

歌

種

葛蒲生る河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

韓衣

脱衣ふくむて其の北に渡りて其の南に渡りて

常陸

子代延

加河河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

歳徳乃かき河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

向ふふ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

去年は河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

たつて河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

棲ふ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

たつて河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

棲ふ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

たつて河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

棲ふ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

たつて河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

棲ふ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

鶯

班衣加縫二

まづ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

常陸

歌

良

青龍一四

班衣

かき河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

信小系

久

まづ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

かき河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

まづ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

かき河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

まづ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

かき河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

まづ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

かき河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

まづ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

かき河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

まづ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

かき河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

まづ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

かき河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

まづ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

かき河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

まづ河川に其の北に渡りて其の南に渡りて

桂

校

角

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

校

解多世人と云ふ事... 眞人

松久松の事... 仙臺

戸を... 上井中

破... 全

... 全

春... 音

青柳... 歌

秋... 上井中

明... 唐

百... 南歌

青龍 五

地境も... 人

... 仙臺

世... 唐

明... 全

長... 上井中

常... 長

... 南

... 利

今日... 子

新... 義

上平舍下脫

中郎

日市

八日市

朝

下サ子經

文

卷之六

8

武吉川

青

全增本

卷之六

信水亭

子

吳昌碩

其

川侯

芳

卷之四

青龍一七

信小德

德

上沙多金

循

仙

石

信小原

醜

全

主

物

吳光

五十六

五因

上
十
五
日

川龍

天

韓衣加絺

花

此卷乃王羲之草書

常盤子うち牌りなり戸をたぐ　強波乃垂るに雲梯
花はあも追ふられて迹由家の門乃柳も神や替めん
ぬれこもせほくぬのち掛表裏にあも遠きぬの青柳
志ごも春乃癖い高きに柳毎になを柳も今割け
係傍枝割るえよ此細煙りまも今の門乃青柳
新橋とてする事あはれ今よりもとく目も穿くの青柳
なを今後乃おれとも川中極々揺め流れて打る柳
形あはれ風の深あはれ是見よとよのちぶらや門乃青柳

仙臺一
照子
稲上井東金
全中飽
成里
武吉川
八日市
矢雄
稻守

系道里通人乗柔雄守

春戀

班衣加槌三
人むふ不神なり事而隊毎尔我應ふ此之増り事なり
排久基
班衣
梅う香に秋月をさあき腰事風不誘をねり人急ふあり
令
徳
書卷一十

書
卷
十

令德

書
卷
十

よし一重のふきも梅の雪とありて遠漕舟の風も通せん
 我胸乃さびのたけはひもあはる君も昔よりよき人なり
 白き何そと問ひ神乃上成座乃様のおもひと昔の
 我無の隠事ありて是に似て志ありてに神のめりなり
 美言は事なり我を憐れ一日とてその名は清きなり
 夢ありて神は海や様はあはる昔よりよき人なり
 世をさす花はさきとてふは君もいひとてふ人
 晴るありて海は神乃事なりとてふは君もいひとてふ人
 終さす人なりとてふは君もいひとてふ人
 賢て一とてふは君もいひとてふ人

常世
 宇
 嘉年子
 全
 曙
 一
 輝
 全
 竹
 千
 音
 角
 成
 歌
 長
 世
 奥
 奥日山
 上井坂志
 八日市
 教父官

守

嘉年子

全

曙雄

一
與

輝也

全

竹
長

午歌

音成

角
朽

上巻 巻頭

韓衣加雄一

早瀬のしもが加ふる花をさるる一は花は玉章

因 於

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

常流 常

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

信前 月

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

全 永

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

在力 浦

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

書 保

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

上 稻

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

武大 穀

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

仙 南歌

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

一 葉

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

全 葉

書 二 十一

韓衣

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

花 満

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

格 人

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

常流 常

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

信前 月

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

書 保

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

上 稻

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

武大 穀

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

仙 南歌

花をさるる花は玉章の花を拂ふ花

一 葉

上生念脫
下ササ子
全

夢は舞ふ何んや我春の事と知せぬはに
上サ美田 龍 魚

あふぬきもよるふれを花とふめれ雲のむかりふ
下ササ子 浦 人

まふらふけれ花とふめれ雲のむかりふ
全 阿 九

あふぬきもよるふれを花とふめれ雲のむかりふ
下ササ子 保 利

あふぬきもよるふれを花とふめれ雲のむかりふ
全 角 標

あふぬきもよるふれを花とふめれ雲のむかりふ
下ササ子 吞 安

あふぬきもよるふれを花とふめれ雲のむかりふ
上サカリヤ 角 標

あふぬきもよるふれを花とふめれ雲のむかりふ
上サカリヤ 吞 安

班衣如挂二

寄山恋

順の海月目々西海の山あはれなむと云ふ

一 身
青龍一士

班衣

佐新乃松花はるる屋敷もさるる山あはれなむと云ふ
仙衣 余 人

あふぬきもよるふれを花とふめれ雲のむかりふ
仙衣 伊 志 女

あふぬきもよるふれを花とふめれ雲のむかりふ
仙衣 一 葉

あふぬきもよるふれを花とふめれ雲のむかりふ
在カリヤ 圓

あふぬきもよるふれを花とふめれ雲のむかりふ
上ササ子 千 歌

あふぬきもよるふれを花とふめれ雲のむかりふ
仙衣 一 葉

あふぬきもよるふれを花とふめれ雲のむかりふ
上ササ子 千 歌

あふぬきもよるふれを花とふめれ雲のむかりふ
上ササ子 千 歌

あふぬきもよるふれを花とふめれ雲のむかりふ
上ササ子 千 歌

おきけりしは...
上巻

侍の目につく恋のみちやと只戸田もさるねづの山 井中殿 物 後

おきけりしは... 里 人

おきけりしは... 人 人

おきけりしは... 今 徳

おきけりしは... 全 浦 派

おきけりしは... 南歌系 子 代位

おきけりしは... 子代位 深 安

おきけりしは... 深 安 床 の 子

おきけりしは... 床 の 子 房 九

おきけりしは... 房 九 考 九

考九 十三

おきけりしは... 考九 考 九

おきけりしは... 考九 考 九

おきけりしは... 考九 考 九

おきけりしは... 考九 考 九

おきけりしは... 考九 考 九

おきけりしは... 考九 考 九

おきけりしは... 考九 考 九

おきけりしは... 考九 考 九

おきけりしは... 考九 考 九

磯 浪

青乾一十

水
產

音高

月良

青龍一十九

全全
茂
能

全
可
保

全

全全
大
一

全 全
可
保

全
荷
雄

全

全
大
一

全

全

全
林
壺
考
卷
一
十六

楊 盛
考 一十六

全

晉
推

可保

全

香川
歌
雄

子
老

朱史
高名聲

高名聲
歌

全 弘
旅

全
萬名錄

惠名養

かゝる中からいかにいかに
白乃かゝるにわたり

錢謙吉

香を旅々隣乃梅の香とに混びく柳の香を求めあふ

山入

韓衣如植一

此を以て後につづるにあらざるべしとて
 補給せしむ

全

應雲衲云此種多之於於七子者爲中榜のさうと云はれ

吳忠陳

班

以^衣も憂ふに堪はたふ所なれ白浪と云ふる也

康
晉

韓衣

新衣
青柳乃弟也志之小堂可也之堂也亦之三橋也山本

全

能諧歌青龍百首卷一終

青苑一十七

俳諧歌籠百首卷之二

撰者桂居音高

送芳草

班衣加毳二

道の不居事なり多かる。年々お堂より左の中にすくもみなり

子代延

班衣

未^レ終^ル肩^ヲや^レ載^ルる^ハ言^ハは^レた^リは^レ股^ヲや^レる^ハ

字叔宣

廣
任

海峽の雪に春風吹きてりえ柳らんみちたれな子

武吉川

秋芳

水也。今、漢江、前、其、の、里、に、内、も、流、れ、を、尋、て、と、す、也。

德成

[illegible]

甲府

物
集

笠入舟
吉岡内山の麓道麿のへきへきありけ程

草丸

續江表志曰白頭山後と書ふも元と云ふ臣等所不達

晴
風
雄

所禱多獲三獲之三菩提佛の聖徳を慕ひて這に生る

志氣

東漢之末子雲々々中若生々爲之悲々々中神乃古遠

策

以つて十日酒を煮てまろにゆづる。及乃る草

南歌子

花は山に生るるに似たり

百揀

因に實を立ちり、
乃ちのち義とを執て
あるが如し

持

旅人等はけちておそろしく思はれてゐるひとあまた

新令

婦人等も皆一見の補子に感服す

一
葉

道に生る腹をもつる者なり云々云々云々

游
寺

燈をけずともあらずに燈のえあるみちを歩

長
永

東の海に於て、
蘇我の皇子は、
海に沈み、
死す。

是人

多布と虎と先と和ん厚と乃と床縁と草とを記す事

友商

寺井一基石母にうゑつ延々兄弟ありと云ふ所也

聖人

青龍二

稻
持

未終ハ初ノ夢ニ如ク夢テ如クニ云クニ云ク

水

陽の夜はふりそそぐ人知れずしりぞく道はあやふし

成
為

為孝乃福也生新不事父母送老之

卷一

美人の幽昇抄を贈る事乃ち其の如く

廣
張

古柳乃懷柔之來一語をもりて事の上を次の美州

亥

秋生庵に屋瓦を葺くといふと、
このころはもう冬と雪が来り

相 好

是乃之通并於燔之下より由る草

五言古詩

少頃乃下舟而後已

卷之五

卷之五

石上

卷之八

1

華を以て事此を義に交ふの如く素花道に若草

上巻 巻頭
かきつばたのうらなひをうらなふ

梅盛

班衣如梅二

昔川入流花を白くし海山乃梅を盛る如く

花 満

群芳を神を梅の花の香もとるありある梅さる宿

物 藥

班衣

香花を吸ひし梅の花を似し神は梅の盛ををる

歌 沙 丸

中世梅を梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

物 種

咲梅の白ひきとる花を今も梅を盛る如く

見 揚

梅を盛る如く梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

石 音

梅を盛る如く梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

唐 琴

梅を盛る如く梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

子 里

梅を盛る如く梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

歌 種

梅を盛る如く梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

草 丸

青松二二

盛る如く梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

万 守

班衣如梅一

梅園を梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

大 一

梅園を梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

子 代 延

梅園を梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

氣 澄

梅園を梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

群 世

梅園を梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

重 丸

梅園を梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

石 門

梅園を梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

行 長

梅園を梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

草 丸

梅園を梅の咲く天井のひかり梅を盛る如く

梅 盛

盛内とありあう江は掘打を以てて腰丈垣に梅うえ

信女系

近

一松をまわし梅の香に近きと花の香の香をわきま

秋

芳

山守人の唇も舌の香の香をまわしやとて一松

村

立

香をまわし風の役も知れぬ梅の香をまわしやとて

春

安

素垂の猶もまわし梅の香をまわしやとて

野

人

つ枝をわきまし梅の香をまわしやとて

梅

枝

上野波はる梅の香をまわしやとて

梅

持

梅の香をまわし梅の香をまわしやとて

武吉川

音

香をまわし梅の香をまわしやとて

全

穂

此の香をまわし梅の香をまわしやとて

全

成

花の香をまわし梅の香をまわしやとて

全

菊

重

青松二三

山守人の唇も舌の香の香をまわしやとて

初年子

その香をまわし梅の香をまわしやとて

下甘干信

香

素垂の猶もまわし梅の香をまわしやとて

上甘干信

文

香をまわし梅の香をまわしやとて

上甘干信

人

素垂の猶もまわし梅の香をまわしやとて

仙

琴

素垂の猶もまわし梅の香をまわしやとて

全

光

素垂の猶もまわし梅の香をまわしやとて

甲

方

素垂の猶もまわし梅の香をまわしやとて

下甘干信

草

素垂の猶もまわし梅の香をまわしやとて

在力りや

圓

素垂の猶もまわし梅の香をまわしやとて

在力りや

九

素垂の猶もまわし梅の香をまわしやとて

在力りや

圓

班衣加植二

師控

海見の如き子供を小連てまはるに控書し

信小系 仙 濃

燕鳥をまゐるに控書し

川 一

控書し

信小系

控書し

永

控書し

八日市

控書し

仙 素

控書し

上計赤金

控書し

字 粉雪

控書し

久 方

控書し

青龍二 四

韓衣加植一

本居の如き子供を小連てまはるに控書し

上計赤金

控書し

在力

控書し

花

控書し

信小系

控書し

秋

控書し

相 補

控書し

上計赤金

控書し

信小系

控書し

信小系

控書し

信小系

力 守

信戸田 菰

信戶田 長

深

物

龍

福

秋

仙 千

角

在

清龍二六

万守

七
得

成
 雄

水
辰

日市
之義
雄

福造

嘉年子

物好

入

手寫
英
似
照

秋
象
堂

水邊落花

班衣如翅三

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

班衣

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

青龍二九

花をさふくく風を響く白鳥と人

内

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

南園川花原く花をさふくく風を響く白鳥と人

新

入

韓家抄一

南

月影も移して水に浮花の影もあやうくあはれそあら

相高知 歌油丸

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

上サカヤ 浦

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

全金 縮

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

武川 磨

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

全増 房

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

安久

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

下サカヤ 豊

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

竹垣

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

一 奥

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

上サカヤ 人

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

全美田 魚

書三十一

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

相浦 炎

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

魚丸

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

高車

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

新樹

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

八日市 名

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

保利

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

仙臺 像

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

我大快 任

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

通書恋

班衣加推二

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

甲府 尼

あはれそあら花の影もあやうくあはれそあら

草 九

九

言むの陸も二人はわづらひてして得る玉章

南歌象
上甘木金

人の事志はるゝの事章も志の下に隠てもとえ

福珠

解ふまゝやもて解ふまゝは人よあけやうとて解

全

懐ふ隠せしを玉章の心はあてむる心はあてむ

志直

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

下毛初本
松盛

韓衣加推

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

光良

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

下甘木金
赤年子

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

下甘木金
古道

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

下甘木金
表地

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

下甘木金
秋産

青蛇二十一

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

甲府

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

武能金吾
力直

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

松言松
二字守

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

下甘木金
志直

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

下甘木金
子代任

韓衣

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

下甘木金
定丸

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

下甘木金
百株

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

下甘木金
光成

あつた懐ふあせと解ひてとて人の心又わづけけ

下甘木金
石音

安久乐

老翁を以て其の残るを以て其の

幸くして近しくおとみにしる者と我をいふは

寄川戀

班衣加緇二

表如植二
世其方乃人の目其平能川流は深あるをみま

花滿

京都府のつるぎをたてしむるに
花はさき世に川

桂校

中江藩よりあつた早稲も豊後肥後川

角 擗

贈高麗公毒草江通き水々土著し其胸のふくまを

在 費

新
なる水は源もあがれど五穀を流してはる古田川

上
一
奥

恋球の牙の根の本と云ふとけりる言ふ五川流のよう

吞安

[illegible]

不代延

流ての事までとてを繋ぎ置け派なちておふ水川

武吉川
成
業

流為嘉名中世之川花亦歲仇誰之

下廿第
為
能

何の事あるに河川と云ふは物あるや、是れ地味

歌
年

西川禮之助とて人知ぬ個の團王の志をせん

萬求

包氏余方史家號其謂川則系于江海源之即

大志菊

五十年の古きとも無敵川海我々の命ありけり
 韓衣加植一

滿

夢の如く世を夢に見て
川原乃如く立てて

泥

乙卯川邊野原の屋敷に小娘一人あり

俾志

互に河を流すに川流ありては

高 求
久保田

忠孝事人みんを神川仇尔事名清さるる

今日出山
美似之

喜作事の終るを勝もはるかに流るる川の如く

竹
長

山を越えたり。香川を隔て、我々の間に、
武大沢 安

まぬ。後、
全葉を合 在 費

まぬ。後、
下寸本の寄 大 水

まぬ。後、
信柏本 山 採

まぬ。後、
全小信 百 人

まぬ。後、
全葉林 約

まぬ。後、
上條中條 里

まぬ。後、
全小信 四友新

まぬ。後、
全 九

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

まぬ。後、
下寸本の寄 丸

非書錄百首卷二

冠をたてて、急ぐにやむをうし、
 風子ありありと、
 〇

1811-1812-1813-1814-1815-1816-1817-1818-1819-1820-1821-1822-1823-1824-1825-1826-1827-1828-1829-1830-1831-1832-1833-1834-1835-1836-1837-1838-1839-1840-1841-1842-1843-1844-1845-1846-1847-1848-1849-1850-1851-1852-1853-1854-1855-1856-1857-1858-1859-1860-1861-1862-1863-1864-1865-1866-1867-1868-1869-1870-1871-1872-1873-1874-1875-1876-1877-1878-1879-1880-1881-1882-1883-1884-1885-1886-1887-1888-1889-1890-1891-1892-1893-1894-1895-1896-1897-1898-1899-1900-1901-1902-1903-1904-1905-1906-1907-1908-1909-1910-1911-1912-1913-1914-1915-1916-1917-1918-1919-1920-1921-1922-1923-1924-1925-1926-1927-1928-1929-1930-1931-1932-1933-1934-1935-1936-1937-1938-1939-1940-1941-1942-1943-1944-1945-1946-1947-1948-1949-1950-1951-1952-1953-1954-1955-1956-1957-1958-1959-1960-1961-1962-1963-1964-1965-1966-1967-1968-1969-1970-1971-1972-1973-1974-1975-1976-1977-1978-1979-1980-1981-1982-1983-1984-1985-1986-1987-1988-1989-1990-1991-1992-1993-1994-1995-1996-1997-1998-1999-2000-2001-2002-2003-2004-2005-2006-2007-2008-2009-2010-2011-2012-2013-2014-2015-2016-2017-2018-2019-2020-2021-2022-2023-2024-2025-2026-2027-2028-2029-2030-2031-2032-2033-2034-2035-2036-2037-2038-2039-2040-2041-2042-2043-2044-2045-2046-2047-2048-2049-2050-2051-2052-2053-2054-2055-2056-2057-2058-2059-2060-2061-2062-2063-2064-2065-2066-2067-2068-2069-2070-2071-2072-2073-2074-2075-2076-2077-2078-2079-2080-2081-2082-2083-2084-2085-2086-2087-2088-2089-2090-2091-2092-2093-2094-2095-2096-2097-2098-2099-2100-2101-2102-2103-2104-2105-2106-2107-2108-2109-2110-2111-2112-2113-2114-2115-2116-2117-2118-2119-2120-2121-2122-2123-2124-2125-2126-2127-2128-2129-2130-2131-2132-2133-2134-2135-2136-2137-2138-2139-2140-2141-2142-2143-2144-2145-2146-2147-2148-2149-2150-2151-2152-2153-2154-2155-2156-2157-2158-2159-2160-2161-2162-2163-2164-2165-2166-2167-2168-2169-2170-2171-2172-2173-2174-2175-2176-2177-2178-2179-2180-2181-2182-2183-2184-2185-2186-2187-2188-2189-2190-2191-2192-2193-2194-2195-2196-2197-2198-2199-2200-2201-2202-2203-2204-2205-2206-2207-2208-2209-2210-2211-2212-2213-2214-2215-2216-2217-2218-2219-2220-2221-2222-2223-2224-2225-2226-2227-2228-2229-2230-2231-2232-2233-2234-2235-2236-2237-2238-2239-2240-2241-2242-2243-2244-2245-2246-2247-2248-2249-2250-2251-2252-2253-2254-2255-2256-2257-2258-2259-2260-2261-2262-2263-2264-2265-2266-2267-2268-2269-2270-2271-2272-2273-2274-2275-2276-2277-2278-2279-2280-2281-2282-2283-2284-2285-2286-2287-2288-2289-2290-2291-2292-2293-2294-2295-2296-2297-2298-2299-2300-2301-2302-2303-2304-2305-2306-2307-2308-2309-2310-2311-2312-2313-2314-2315-2316-2317-2318-2319-2320-2321-2322-2323-2324-2325-2326-2327-2328-2329-2330-2331-2332-2333-2334-2335-2336-2337-2338-2339-2340-2341-2342-2343-2344-2345-2346-2347-2348-2349-2350-2351-2352-2353-2354-2355-2356-2357-2358-2359-2360-2361-2362-2363-2364-2365-2366-2367-2368-2369-2370-2371-2372-2373-2374-2375-2376-2377-2378-2379-2380-2381-2382-2383-2384-2385-2386-2387-2388-2389-2390-2391-2392-2393-2394-2395-2396-2397-2398-2399-2400-2401-2402-2403-2404-2405-2406-2407-2408-2409-2410-2411-2412-2413-2414-2415-2416-2417-2418-2419-2420-2421-2422-2423-2424-2425-2426-2427-2428-2429-2430-2431-2432-2433-2434-2435-2436-2437-2438-2439-2440-2441-2442-2443-2444-2445-2446-2447-2448-2449-2450-2451-2452-2453-2454-2455-2456-2457-2458-2459-2460-2461-2462-2463-2464-2465-2466-2467-2468-2469-2470-2471-2472-2473-2474-2475-2476-2477-2478-2479-2480-2481-2482-2483-2484-2485-2486-2487-2488-2489-2490-2491-2492-2493-2494-2495-2496-2497-2498-2499-2500-2501-2502-2503-2504-2505-2506-2507-2508-2509-2510-2511-2512-2513-2514-2515-2516-2517-2518-2519-2520-2521-2522-2523-2524-2525-2526-2527-2528-2529-2530-2531-2532-2533-2534-2535-2536-2537-2538-2539-2540-2541-2542-2543-2544-2545-2546-2547-2548-2549-2550-2551-2552-2553-2554-2555-2556-2557-2558-2559-2560-2561-2562-2563-2564-2565-2566-2567-2568-2569-2570-2571-2572-2573-2574-2575-2576-2577-2578-2579-2580-2581-2582-2583-2584-2585-2586-2587-2588-2589-2590-2591-2592-2593-2594-2595-2596-2597-2598-2599-2600-2601-2602-2603-2604-2605-2606-2607-2608-2609-2610-2611-2612-2613-2614-2615-2616-2617-2618-2619-2620-2621-2622-2623-2624-2625-2626-2627-2628-2

[illegible]

韓文

子食水音

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side.]

[illegible]

張九齡上書

謝次昌

俳諧歌青龍百首卷之三

撰者桂居音高

蝶

斑衣加捶二

事此野乃噫乎以形以入松葉放歌 爲解牛謀

中へ今も孫は形とそお婆よりの上の様

唐生此文之裏余舞蝶の舞乃若紅を何の魂

朽木に枝木なり花をもちて藤の葉をまゝん

清江先生集卷中世孫陳八仲子新自杭來書

牛車抄臨一花不似來子婦つひも痛に思ふ

衣
最乃枝未暇事_{ハナ}惜_{ハナ}
{ハナ}山枝{ハナ}おに結_{ハナ}糸_{ハナ}を_{ハナ}る_{ハナ}

柳陰那子於塘也系我衣襟
流不暖与山吹

仙臺

秩父宮

表

1

皮

万

武大沃

歌

下
寸
册
子

竹

契目出山

竹

午臺

10

乃其の事を福とて流るるに救くえとて錦標花
伝小伝 百 株
 長安の龍不眠の標人一人とありて其の事
上寸葉田 龍 魚
 長乃ある龍とて其の眠る標に在りて其の事
 久 方
 其の龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
 南歌集
 草生れ此の標とて其の眠る標に在りて其の事
武草加 早 丸
 我の龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
 全
 其の龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
上寸葉田 稻 味
 龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
下寸葉田 梅 盛
 龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
我と云 山 入
 龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
甲府 草 丸
 龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
 青丸三十一

韓衣加龍一

梅の龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
 保 利
 龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
 安久永
 其の龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
 野 人
 其の龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
 九十九女
 利の龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
甲府 門 葱
 龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
伝小伝 枝 成
 龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
上寸葉田 文 雄
 龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
八日市 光 良
 龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
仙臺 光 門
 龍不眠とて其の眠る標に在りて其の事
秋父官次 表 地

上并新谷

物多き一は時や早急なるも願ひて眠りたりん 武吉川 子代人

風あはに雲よりと金六橋花梅より平一様れひとわれ 全 水 彦

花す末ても花南房牙より市橋もなむ市物花 全草加 菊 重

車は目にむかひ接大橋よりちる山吹のなかりとちれ 全 三千九

女史中膝よりとる人あを足廻りとも橋やを望 上并新谷 早 九

逆は水影を移せる鏡の橋をわゆる池の底河 上并新谷 稲 味

春月出

班衣加提二

車はあはに花の月へみさび池の底あを望とを見る 武大沢 淳 安

花は出て雲を海り入る花柳の影を車はあはの月 相寄何に 衛 氏

雲ての月より分給一圓東山の車はあはの月 下并手河 輝 世

うち度ふ雲は朝乃三月月の雲より柳の影因は白魚 青龍三ノ二 稲 九

志は山雲にあはに車はあはの月乃花を荒れとる 伊志女

大東に雲あはの月より花よりと花は清水尋とる 秋 芳

車はあはに月より花よりと花は清水尋とる 武大沢 淳 安

車はあはに月の花乃雲よりと花は柳の影とる 下并新谷 定 九

車はあはに雲はあはに月乃花よりと花は清水尋とる 相寄何に 晴 雅

早瀬川影は流せとる又雲は花は清水尋とる 仙臺 衛 氏

花はあはに山吹よりと花は清水尋とる 信小系 系 人

花の雲よりと花は清水尋とる 上并新谷 稲 見

月影のさきに花は清水尋とる 全草加 嘉 年子

花はあはに雲はあはに月乃花よりと花は清水尋とる 全草加 稲 魚

韓衣加提二

韓衣

天乃示多子付以幽室以望之
比九志

有彩也花乃香より折胞吉世淡きと漏中より人
在 災

五子子也とはうのまづ國境にふたつありて
千代臣

遅日

今新法の時と云ふ遠くは未だ老てや物忘れく
輝世

青沁三三

第壹一冊 見入たものすで龍や雲のうきをあらわん
南 悟

伊勢大和土佐日記
八日市
羅
雄

下井千鶴

ふくむに類くあふまふの目乃あふむふくむふくむ
全場森

葛飾のまゝに拵がて竹笠は宿の湯までと言ひ見ゆ是
下木系
笑

武訪索

友丸

比九志

七
永

在
費

種

千代臣



卷之四

卷之七

卷之五

青
三
三

秋芳

角
檣

方

雄

入

卷之五

二

己

名

笑

まふ日はそぞろ人あはれりぞとてく脊をせん 上ナリヤ 千代人

春雨

斑衣加搥二

斑衣

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 武草加 三千九

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 我末 山入

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 甲府 門燕

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 千代延

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 奥白川 能

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 八日市 歌能

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 下市道 能

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 安久保 能

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 高 車

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 甲府 草九

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 上ナリヤ 晴

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 之ノ今尾 泉

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 万 守

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 名古金 物種

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 下市道の 船

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 梅 盛

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 仙臺 千

あけあけまはれしものあはれりぞとてく脊をせん 八日市 能

韓衣加搥二

夥あつて山乃小葉にもちてとよとゑむ事

下ナナヲ
上ナナリヤ

丸

海雲に眠する花あつて静る海を度乃事

武増森
全我全

丸

苗伐の苗をそつて事由の民州おもむく事

全我全

丸

浦棠と柳半の眠居て事由のめをもたぬ事

全大沢
在

丸

時由のふりた替りて事由に丁内事はさ増りり

全大沢
歌

丸

韓衣

娘ささふとくく因ちて依おも眠居る事由は信

下ナナヲ
父

丸

皆た淑をく流り事由の就のたれおれ種この母

全

丸

事由の古に持来る事あつてふりた事新に事

仙臺
子

丸

うぞいもの事由におふるふりた何の能い事新に事

仙臺
子

丸

事由の古に持来る事あつてふりた事新に事

仙臺
子

丸

連や陽の海のきき近に事あつて事

全

丸

書三ノ五

機花あつて事由の事あつて事今日とあつて事

後父宮次
角

丸

唐草の苗をそつて事由の事あつて事新に事

上ナナリヤ
肉

丸

於ふの清り事あつて事由の事あつて事新に事

全
浦

丸

事由の古に持来る事あつて事新に事

全
年

丸

事由の古に持来る事あつて事新に事

全
南歌

丸

事由の古に持来る事あつて事新に事

全
草

丸

事由の古に持来る事あつて事新に事

全
景

丸

事由の古に持来る事あつて事新に事

全
松

丸

瀧下山吹

班衣加地二

瀧乃かに山吹の立機入る事あつて事新に事

赤年子

丸

班衣

流き山と静んー山吹物のぬきにおとろけ花

八日市

万守

辰満

唐琴

石門

群世

圓

保利

歌

里人

南歌

丸

青龍三六

全

仙臺

山吹の花は歌うく流しせの葉を黄きに流しとて人

今も花老にほそく流し流し酒の心ろそふ山吹の花

今も花老にほそく流し流し酒の心ろそふ山吹の花

今も花老にほそく流し流し酒の心ろそふ山吹の花

今も花老にほそく流し流し酒の心ろそふ山吹の花

今も花老にほそく流し流し酒の心ろそふ山吹の花

今も花老にほそく流し流し酒の心ろそふ山吹の花

今も花老にほそく流し流し酒の心ろそふ山吹の花

今も花老にほそく流し流し酒の心ろそふ山吹の花

音あはれ流のちうに物いそぬ花のきも終合ー山吹

武蔵客

在

花はさうの衣の流の山吹ふきと流し口あー下ー

下木木

大

物いそこのちうに物いそぬ花のきも終合ー山吹

甲府

門

音あはれ流のちうに物いそぬ花のきも終合ー山吹

上木在

圓

音あはれ流のちうに物いそぬ花のきも終合ー山吹

秋貢亭

五

音あはれ流のちうに物いそぬ花のきも終合ー山吹

武大沢

歌

音あはれ流のちうに物いそぬ花のきも終合ー山吹

下毛古橋

安

音あはれ流のちうに物いそぬ花のきも終合ー山吹

我若思

山

音あはれ流のちうに物いそぬ花のきも終合ー山吹

全

音あはれ流のちうに物いそぬ花のきも終合ー山吹

千代延

音あはれ流のちうに物いそぬ花のきも終合ー山吹

琴

音あはれ流のちうに物いそぬ花のきも終合ー山吹

雄

山吹物りもねぬ花あはれん金ある音ありは庭 保利
 山吹の葉金れおふ様したる酒もろのあはれを庭 三
 酒乃るの四方に音をききしは庭の葉も山あはれの花 二
 又また酒あはれし山吹の葉庭の葉のよに吹く 浮
 山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花 全
 山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花 竹
 山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花 松
 山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花 安
 山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花 成
 山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花 盛
 山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花 根

暮春

斑衣加植三

谷川ふさふさ花の流るるも流るるまはるるみまはる

上井成本

青森三二七

斑衣

山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花

八日市

山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花

上井成本

山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花

上井成本

山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花

上井成本

山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花

上井成本

山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花

上井成本

山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花

上井成本

韓衣加植三

山吹の白地わたりしは庭の葉も山あはれの花

上井成本

青森三二七

重刊

本草加稻

八日市早

仙臺

石

泥

八日市免

平

全大房

浮

緇見
青龍三八

卜才の海
梅

27

秋

山臺新

千

稻

甲府女

草

永

谷

遊

丸

丸

丸

文海

枝

成

附 父

九 旗

安丸

先安

我神の如きにもあらず 夢人よふも此の心 浪乃玉章 武吉川 後成

五さう物とて知るて 夢人の心とてあらず 乃中一は 真菊

渴きけ 浪乃玉章 八あふにあらざる 乃中一は 千代位

夢人よふもあらず 妹を捨てて 夢人よふもあらず 乃中一は 芳章

疾き心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 百株

節給ふも 猶も 夢人よふもあらず 乃中一は 琴雅

夢人の心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 追風

青柳の心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 梅盛

班衣加担二 寄海恋 岩峰 景隆

班衣 夢人の心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 仙臺 唐琴

班衣 夢人の心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 唐琴

夢人の心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 武吉川 風 芳

夢人の心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 秋 芳

夢人の心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 福 見

夢人の心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 草 九

夢人の心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 草 九

夢人の心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 草 九

夢人の心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 草 九

夢人の心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 草 九

夢人の心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 草 九

夢人の心とて 夢人よふもあらず 乃中一は 草 九

鳥

班衣加翅二

横雲は橋の下にもくくあり身にくくくぬき乃小鳥

八日市

東

草

九

星降れ七の法師の降るは母神様とてよゆりかた

真

菊

菊は花をみよとて参籠ふあまくと鳴り鳥の形

房

九

樹出る鳥は母神様とてとて参籠ふあまくと鳴り鳥の形

真

直

班衣

通ふとて啼き渡りて舌は根の一寸とて舌の根は鳥

義

笑

韓衣

とく氣て新納の谷をわたり時をたてて鳴り鳥の形

成

葉

後持の法師とて舌は根の一寸とて舌の根は鳥

雛

望

風降れ今たはまはるるあまの舌は根の一寸とて舌の根は鳥

並

人

はる歌のそのあまの舌は根の一寸とて舌の根は鳥

青磁三十

くらけの法師女も参籠ふあまの舌は根の一寸とて舌の根は鳥

伊志女

新波の法師女も参籠ふあまの舌は根の一寸とて舌の根は鳥

銭別

班衣加翅二

肌あはるく安らけ啼りてとて舌は根の一寸とて舌の根は鳥

班衣

手あはるく安らけ啼りてとて舌は根の一寸とて舌の根は鳥

晴

をねむけはるあまの舌は根の一寸とて舌の根は鳥

成

保勢法師十の十とて参籠ふあまの舌は根の一寸とて舌の根は鳥

雄

送り来て別とて参籠ふあまの舌は根の一寸とて舌の根は鳥

内

新あまの参籠ふあまの舌は根の一寸とて舌の根は鳥

大

韓衣加翅一

くらけの法師女も参籠ふあまの舌は根の一寸とて舌の根は鳥

千代延

別ういふあめさうく 秋芳 成 兼

旅衣人自ち物さふさう 秋芳

天のらんあつらうつ 秋芳

秋芳 別ういふあめさうく 秋芳

あつらう人日別てん 秋芳

され秋ふ月見代 秋芳

又逢とふひあうも 秋芳

日わすくとあひて 秋芳

備 扇面画讀合 撰者 吳竹亭真直

十五 秋 七 糸

青巻三ノ上

川原もあひあふ 秋芳

受く宵つらう 秋芳

またあふ青波あう 秋芳

秋芳 別ういふあめさうく 秋芳

追加蝶

花は流滞うて 秋芳

俳諧歌青龍百首卷之三終

俳諧歌青龍百首卷之三終

俳諧歌青龍百首卷之三終

俳諧歌青龍百首卷之三終

新語集音韻正名卷之三終

轉字註一

新語集

新語集音韻正名卷之三終

真直

新語集音韻正名卷之三終

上

新語集音韻正名卷之三終

日

佛語歌青龍百首卷之四

撰者桂居音高

餘花

班衣如翅二

新語集音韻正名卷之三終

上

新語集音韻正名卷之三終

角

班衣

新語集音韻正名卷之三終

一

新語集音韻正名卷之三終

肉

新語集音韻正名卷之三終

後

新語集音韻正名卷之三終

浦

新語集音韻正名卷之三終

圓

人 橘 象 見 匠 成 浪

山花の香気の中の一花の風もんやあつたさう
信小松 結成

夢つゝ宿の山花の香気の中の一花の風もんやあつたさう
南歌集

山花の香気の中の一花の風もんやあつたさう
真菊

元乃露の香気の中の一花の風もんやあつたさう
雪丸

嬉々たる山花の香気の中の一花の風もんやあつたさう
下才梅井 物築

朝の物乃をちも早うもあつたさう
河

入相の香気の中の一花の風もんやあつたさう
真車

棒の香気の中の一花の風もんやあつたさう
真

梅花の香気の中の一花の風もんやあつたさう
全 角

暖かい梅の垣の影の風もんやあつたさう
韓衣加越 角

りーまの香気の中の一花の風もんやあつたさう
文

青龍四ノ一

山花の香気の中の一花の風もんやあつたさう
下才梅井 水

りーまの香気の中の一花の風もんやあつたさう
武吉川 水

行へ春の香気の中の一花の風もんやあつたさう
因

入の香気の中の一花の風もんやあつたさう
下才梅井 安

其の香気の中の一花の風もんやあつたさう
下才梅井 文

系の香気の中の一花の風もんやあつたさう
保

るの香気の中の一花の風もんやあつたさう
雛

青の香気の中の一花の風もんやあつたさう
下才梅井 永

暖かい香気の中の一花の風もんやあつたさう
甲 草

足元の香気の中の一花の風もんやあつたさう
下才梅井 稻

るの香気の中の一花の風もんやあつたさう
下才梅井 雄

りー事に獲られぬしは様あそびの山 仙臺 一 系

待時鳥

班衣加槌二

見よ今何処人風烟をよみてあけ中よ夢をよ

武吉川

成大

班衣

時をよめ来時ぬと夢をよめねば暦も八せん乃月日

仙臺

待望より一歩りてや時を擧げしや此やあそび

上寸美田

待て事ぬ山田はあつた時をよめ早稲あそび村立

全坂志呂

ふけをよめ時をよめあそびとて幾あそびぬあそび

依敷布旅

ふけに引馴て時をよめあそびとて幾あそびぬあそび

心

まて時をよめあそびとて幾あそびぬあそび

上寸美田

待て日も擧げよ時をよめあそびとて幾あそびぬあそび

下寸美田

待て日も擧げよ時をよめあそびとて幾あそびぬあそび

秋

青四二

韓衣加槌二

見よ今何処人風烟をよみてあけ中よ夢をよ

仙臺

待望より一歩りてや時を擧げしや此やあそび

仙臺

待て事ぬ山田はあつた時をよめ早稲あそび村立

仙臺

ふけをよめ時をよめあそびとて幾あそびぬあそび

仙臺

ふけに引馴て時をよめあそびとて幾あそびぬあそび

仙臺

まて時をよめあそびとて幾あそびぬあそび

仙臺

待て日も擧げよ時をよめあそびとて幾あそびぬあそび

仙臺

待て日も擧げよ時をよめあそびとて幾あそびぬあそび

仙臺

待て日も擧げよ時をよめあそびとて幾あそびぬあそび

仙臺

待て日も擧げよ時をよめあそびとて幾あそびぬあそび

仙臺

待て日も擧げよ時をよめあそびとて幾あそびぬあそび

仙臺

子歌一巻

班衣加搥三

五ヶ一ヶ集極山の時をいふはあはれなるも可南

八日市 信

之

子歌馬一巻を其人の時をいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

杜若馬一巻を其人の時をいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

一巻をいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

人先にいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

時を待てばあはれなるも可南

八日市 義

推

ぬきてきく信因の事乃子歌馬一巻を千枝の常流

八日市 義

推

ふれおふ啼一巻を其人の時をいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

清光の月を其人の時をいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

杜若馬一巻を其人の時をいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

青龍四ノ三

福をいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

時を待てばあはれなるも可南

八日市 義

推

杜若馬一巻を其人の時をいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

子歌一巻を其人の時をいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

思月をいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

幾世乃曉子一巻を其人の時をいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

時を待てばあはれなるも可南

八日市 義

推

危遠山を其人の時をいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

月よみの事乃一巻を其人の時をいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

一巻を其人の時をいふはあはれなるも可南

八日市 義

推

時を待てばあはれなるも可南

八日市 義

推

先門

韓衣加提

下寸多古

薰

久乃ぬ現に二春れ時をら建月のらくくふにあけ

甲府満

春

ちきあく海に雲窓乃時を流の中あふぬ二春

甲府門

燕

一春れ時を流くくくふぬ里までさくをたにりて

甲府宸

阿

小東より現る中一春れさあうくあれ山わとる

伝小法松

阿

二春れゆのき物も時を流れくあれあれいづれ

全継

成

一春れをきくより五つけふをたあふぬ時をうけ

武大伝双

九

時をきけ流る中あけ帰一春れいふれ神を系

武大伝歌

往

保あきまた流る中け西枝も何面もつて今れ春

下寸多古為

菊

ぬあきまた流る中け西枝も何面もつて今れ春

武大伝為

能

書龍四ノ四

非流乃事れ流る中あけ西枝も何面もつて今れ春

武大伝在

契

時をきく流る中け西枝も何面もつて今れ春

上寸成光

良

非流乃事れ流る中あけ西枝も何面もつて今れ春

上寸成極

根

多きれ流る中あけ西枝も何面もつて今れ春

下寸多古極

枝

流る中あけ西枝も何面もつて今れ春

仙臺一

枝

未る中あけ西枝も何面もつて今れ春

八日市義

雄

うた流る中あけ西枝も何面もつて今れ春

信小系

子

流る中あけ西枝も何面もつて今れ春

全年近

近

葛城乃山より来りて時をきく流る中あけ西枝も何面もつて今れ春

甲府本

教

花あけ時をきく流る中あけ西枝も何面もつて今れ春

伝小法門

燕

籠り戸の明方ちりて時を流る中あけ西枝も何面もつて今れ春

下寸多古双

丸

飛鳥山土着のこころはききた藤乃方あつる一孝
上十松丸 秀九
 何なるやあつる一孝にそ新国はあつるやあつる
全かりや 重人
 郭公思一孝にり月をよめいふやう一國に
伝松本 貞重
 天乃京東海月影に影をえ一孝あつる時
上十松丸 里成
 燈をいふ一孝時を啼てあつるやあつる月影
上十松丸 安成
 今わすれたるあつる時を拾ひあつるやあつる
上十松丸 素九
 時を影にいふあつるやあつる月影一孝
上十松丸 梅盛

時を頼

斑衣如龍二
 五丁あつる幾十通りも啼泣するあつる山時を
秋文堂 千代延
 田嶋を頼あつるやあつる月影あつる草苗登人
多松樹田 角松
 斑衣
 なるりあつるの系は頼あつるやあつる山時を
伝 之

時をきく月毎やあつるの系は頼あつるやあつる
八日市 義雄
 時をきくあつるやあつる一孝あつるやあつる
赤年子
 あつるやあつるあつる時をきくあつるやあつる
伝小松 内匠
 待てあつるやあつる時をきくあつるやあつる
伝小松 継成
 赤重頼あつるやあつるあつるやあつる
伝小松 光良
 ちりあつるやあつるあつる時をきくあつるやあつる
上十松丸 菅雅
 韓衣如龍一
 日にあつるの系は頼あつるやあつるあつるやあつる
全多古 保利
 梅乃の系は頼あつるやあつるあつるやあつる
甲府 草九
 時をきくあつるやあつるあつるやあつる
奥岩城 景隆
 何なるやあつるやあつるあつるやあつる

五葉の香もあつてしる舟をよもす清の町

真車

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

真冬

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

梅盛

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

直人

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

後成

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

成

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

真菊

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

在英

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

表地

菖蒲

菖蒲の香もあつたの市街をよもす至井の飛

淳安

青菴四ノ六

一日に春をよもすの舟をよもす清の町

歌種

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

秀九

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

英

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

音成

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

芳

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

成

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

秋芳

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

晴雄

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

成

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

丸

時を待たぬもあつたの市街をよもす至井の飛

在

高々子苗乃玉苗も月夜露に輝けり
 真 菊

今日極々仕舞ひのりし月と年と書物多く早玉安 大

子の乳あうとてゑれた乳の事此因井に子南とる妹
義
権

昇衣

廿一
江早苗播也入我陸尔乃て海軍部女門甲辰

應

其盤ととも因西に平如女に於てと梅留

卷之三

復戀

待以愛人可知待以爲法者亦當以愛人爲侯小松保

通に來る惡し國祚乃身輕にあふ花の咲かざる
下木の花

家長安とてよ
 押しあひきか
 加へて味を
 煮て
 上二重
 馬

あゝあゝ 朝に思ひて夜も思ふ 恋の糸と女房
全坂志保

敬至
がら
姉海いさあか青系要事七生漢元

依小系

音文

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf from an old book. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and a prominent vertical crease on the left side. There is a small, dark, irregular mark near the bottom center of the page. The overall tone is warm and aged.

卷之三

加槌三

復戀

上平聲

[illegible]

衣
花の咲くころ
下す木の葉
花の咲くころ
花の咲くころ

哀あまねくよ
 我りありき
 乃た姉の
 哀を
 上戸
 鳴

あふく朝に起てて夜を待たぬが業と云ふ
全坂志書
頃
文

蘇州府志
 卷之四
 風俗
 音清

仙臺

韓衣加襖一

軍衣くはきし中いさしはのきし浪あは神懸け満
長水

武吉川
成
秀
丸
兼

八日市
新
持
能
九

上井東金
千
篤
持
能
九

信八幡
千
篤
持
能
九

信小松
千
篤
持
能
九

上井東金
千
篤
持
能
九

信小松
千
篤
持
能
九

上井東金
千
篤
持
能
九

信小松
千
篤
持
能
九

上井東金
千
篤
持
能
九

信小松
千
篤
持
能
九

上井東金
千
篤
持
能
九

信小松
千
篤
持
能
九

上井東金
千
篤
持
能
九

信小松
千
篤
持
能
九

上井東金
千
篤
持
能
九

信小松
千
篤
持
能
九

上井東金
千
篤
持
能
九

信小松
千
篤
持
能
九

上井東金
千
篤
持
能
九

信小松
千
篤
持
能
九

信吉川

上井東金

信八幡

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

信吉川

上井東金

信八幡

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

上井東金

信小松

壽室

浦浪

升取

飛持

素地

薑

滿

稻
珠

力りや

湊浪

淳安

淳安
青龍山

秀丸

景隆

真
豐

安成

音高

豐

音高

月
匠

隋
雄

杖芳

○日—あろち
病士往來に孝義

青龍居士

撰者挂居音高

莊子

五月西

此後之學にも其生ひてより其の情奴より其の

伊志女

日利を以て其の時に痛を掛て居るを以て

山井ヒコ

爽

堂中後花堂之因也。烟水爲冠。而夾梅乃長兩

武大沃

浮安

川社をく際迄今日七日入梅干籠を初ふなり

物
藥

一
班

和の花残し一帯の風を吹かすやうに思ふ

上开成车
好

好
板

屋敷の太ももより一寸満
隙ありてはあきより白派

久

久方

金五郎殿より少少の金に包まれてきて喜ばるべく時分の水

安

則

擲物乃通士も饒つゝ高山の系を却てはるありて霜

上什位哲家
逸

逸人

女子爲子婿下聘也。輕駕小人。非也。立見。

常土浦
千

十
策

あゝ此を忍びたの數は多く私に毛生ふるに

肉

月通

葉

真菊

原必未者

上東令

稻見

全七
文

全

全優母系

全板志畧

△ 祚

八日市

上并松丸

青龍五一

秀

三

老浦
松

爽

— 1

法

滿

圓

英

補

3 惟

12

卷之五

丸

Handwritten text in cursive script, likely a poem or a list of items, spanning the upper half of the page.

九
住
能
能
人
口
門
門
喜
菊
清

青龍女，二

Handwritten text in cursive script, likely a poem or a list of items, spanning the upper half of the lower page.

高
三
守
持

瞿麥

Handwritten text in cursive script, likely a poem or a list of items, spanning the lower half of the lower page.

則
則
持
茂
芳
能

池水に橋をたえり新柳の光るや波の由り来 武二合半 二千芳

大井川すたふ常れ光るや波の由り来 我老思 船入樹

二ふちえの心やまのけしむの清水尋て飛 上井カリヤ 満春入

錦川さくさく常れ光るや波の由り来 全 浦浪

青きあけ柳の枝は枝川ふつと常れ光るや波の由り来 全 圓

生園川常れ光るや波の由り来 全 正義

水は上は何も種を浮きあふと常れ光るや波の由り来 全 令徳

幾千とく祥て常れ光るや波の由り来 甲府 門慈

比乃川の常れ光るや波の由り来 伝中流 双丸

そま水の上にて常れ光るや波の由り来 上井八日市 秋芳

石山乃月も常れ光るや波の由り来 上井八日市 義雄

浮きあふ常れ光るや波の由り来 上井八日市 文

笑の池常れ光るや波の由り来 上井八日市 文

青五ノ四

柳の光るや波の由り来 上井八日市 秀丸

きぬ川乃常れ光るや波の由り来 我老思 山入

磨とる常れ光るや波の由り来 上井八日市 稲見

玉指常れ光るや波の由り来 全 安則

之を常れ光るや波の由り来 上井八日市 松茂

龍蛇乃常れ光るや波の由り来 甲府 東宝

山吹花乃常れ光るや波の由り来 上井八日市 門慈

新柳乃枝も常れ光るや波の由り来 上井八日市 双丸

物とぬさにも常れ光るや波の由り来 上井八日市 伊志女

水の乃常れ光るや波の由り来 上井八日市 泥成

おとせも常れ光るや波の由り来 上井八日市 松盛

こそ我も常れ光るや波の由り来 上井八日市 徳

納凉

青龍五ノ五

滿
賴

稻守

笑

九

松空

二 奕

丸

等猶公枝に而せて順に其胞を樹乃事序涼一き
 山入

韓衣
 上并衣金

[illegible]

涼しきいふやうな風にあたりて
 秋の氣がしる事なり
 風

庫舟風不廟のこ相も紅中より陽も社末流は是
全
上井使每家

山風吹雲散
萬物皆生機
此意不可忘
全

送人

史記をきく
時近江の原
風をきく
て之を風
輪全カリヤ
車
人

唐桓舟此浮水行乃自浪尔今日異乎罕之水火
 千案

内氣乃福。氣。心。入。春。之。涼。一。記。水。也。市。門。應。

[illegible]

青熟立ノ七

千代延
 全
 高
 盛
 水
 清

舩中甚月

月影の涼を舟ふきしるるもあつても増たりん
 上舟五折谷
 下舟下め
 月影の涼を舟ふきしるるもあつても増たりん
 上舟五折谷
 下舟下め
 月影の涼を舟ふきしるるもあつても増たりん
 上舟五折谷
 下舟下め

松^下佐^國
茂之

赤丸

采

親
阿

安

招

是
穗

歌
種

樹

溪
平

青龍五八

松阿

秋芳

丸

乙
 月

真
卷

發

无
复

膏
丸

人

失
考

失
速

青氣を吐き出さるゝと云ふ性質の赤を内蔵と
全

梅宗亮云、越く暖江の松戸のりとう、移る事つゝん
わが市に只一寺あり、其寺、松馬の泉あり、泉の邊に石あり、
我々

班
 衣
 曉別恋
 衣
 上
 衣
 衣
 痛
 持

國乃今也明と告る事をあはれおぼざる雲の形ありて
真

人知るべき世間の事を知る者なり
真 直

あつたての國をたふさず井のついでに
永居

由るはく互にあらうとあらうとをえくふれその雲は
 下木

一、新、元、侯の表道をもつて、
 全一宮

光さる人あはるる屋を無人の所よりよむ如し
 ぬふちも今の能おまゝかゝる園地を越え森物によむ
 仙久イ
 一
 枝

香花五十一

是は吾輩の如くは天子さまも通ふ所
 花
 仇兵衛の如くは心は世の人めは國の裁く事也
 伝心
 永
 満
 悟

馬

班衣加搥二

此乃虎尾也試以之入

方乃和緩門因其縮至脊以復一若金其弱以枯風之吹
 久方
 全書九

了る前にさしめゆつ衆主弱強を連稱て實のちを爲
秀 九

昔上をすゝめ侍た。物あるは海より人乃名侍た。久
南歌葉

峯交う小川に如く水春いとのみ事記と重し弱をも
 下木
 岬

名も言ひ置けども約ありのまじりき土地の勢も盡せて糸
仙臺
千
條

雪は牧草も枯れ冬草あり
白泥弱り草木光

武大匠
上并金
種

如之也
 教乃
 尔身
 亦一
 子
 汝
 是
 爲
 下
 天
 稻
 珠

満 頼

あめあめあめのかり
雨後あめあめのかり
あめあめあめのかり

奥川保
赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

青龍五十三

梅盛

九文菊彦雄之雪雲一白

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

赤坂志忠

成業

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

音高

坐 出干

宝市亭大人撰

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

彦子

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

肉近

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

秋芳

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

升成

追加混綴

常祖毛

あめあめあめのかり
あめあめあめのかり
あめあめあめのかり

歌良唐

物の名世因乃玉川
 景
 隆

能諸歌青抱百首五終



五十四

卷之六



